

平成23年 8 月 3 日

平成23年

第 8 回教育委員会定例会会議録

大田区役所 第五・六委員会室

平成23年第8回教育委員会定例会会議録

平成23年8月3日午後2時大田区教育委員会定例会を開催した。

櫻井光政	委員	委員長
藤崎雄三	委員	委員長職務代理者
横川敏男	委員	
鈴木清子	委員	
野口和矩	委員	
清水繁	委員	教育長

計 6 名

2 出席した職員

教育総務部長	金子 武 史
教育総務課長	松 本 秀 男
施設担当課長	西 野 正 成
教育事務改善担当課長	室 内 正 男
学務課長（私学行政担当課長兼務）	飯 田 衛
校外施設整備担当課長	星 光 吉
指導課長（幼児教育センター所長兼務）	小 黒 仁 史
副参事	菅 野 哲 郎
社会教育課長	木 田 早 苗
大田図書館長	原 聡

計 10 名

3 教科用図書採択の審議に出席した関係職員等

指導課 統括指導主事	増 田 亮
指導課 統括指導主事	大 川 優
指導課 指導主事	早 川 隆 之
指導課 指導主事	岩 崎 政 弘
指導課 指導主事	鈴 木 富 雄
指導課 指導主事	小 林 繁
指導課 指導主事	塩 野 恵
指導課 管理係長	桶 川 和 則
指導課 管理係 主任主事	相 馬 毅
指導課 管理係 主事	戸 田 侑 希
教育総務課 庶務係 主任主事	向 田 美 樹
教育総務課 庶務係 主事	富 田 匡 俊

計 12 名

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第13条及び大田区教育委員会会議規則第3条により、第8回大田区教育委員会定例会を招集した者は、次のとおりである。

委員長 櫻井光政

○委員長

ただいまから、平成23年第8回教育委員会定例会を開催する。

本日は、中学校教科用図書採択の審議を行うので、大田区教育委員会会議規則第14条により、関係職員等の出席を求めている。

これより審議に入る。本日の出席委員数は定足数を満たしている。よって会議は成立している。

本日は、定員を超える傍聴希望者が見込まれる。傍聴の定員は大田区教育委員会傍聴規則第5条により10名と規定されているが、同条ただし書きに「委員会が必要と認めるときはこれを変更することができる。」とある。これは、「中学校教科用図書調査委員会からの報告」があり、教科書採択への区民の関心が高まっているためだと思われる。

私としては、区民の関心に応え、公平公正な「開かれた教科書採択」を行うために、大田区教育委員会傍聴規則第5条ただし書きにより、本日の定例会における傍聴人の定数を100名に増員し、傍聴希望者に傍聴を許可したいと考えるが、いかがか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

傍聴を許可する。

(傍聴希望者入場)

○委員長

大田区教育委員会傍聴規則第7条により、傍聴人は議場における言論に対して批評を加え、又は拍手その他の方法により公然と可否を表明することは禁止されている。協力をお願いする。

次に、会議録署名委員に野口委員を指名する。

日程第1は教育長の報告事項についてだが、特段の報告事項はない。

日程第2 平成24年度使用大田区立中学校教科用図書採択について

○委員長

それでは、平成24年度使用大田区立中学校教科用図書採択の審議を行う。

前回、第7回定例会にて、伊藤 清一郎 教科用図書調査委員会委員長から報告書の説明を受けた。各委員には教科用図書を読んでもらうとともに、報告書及び区民・学校意見を参考に真摯に調査研究を進めていただいたと思う。

今回の教科用図書採択の審議対象となるのは、9教科15種目である。本日は、4日、5日に分けて審議を行う。本日は、国語、書写、数学の3種目について審議を行いたいと考える。審議が長引く場合には、明日以降、継続して審議したいと思う。

また、審議の状況によっては、本日予定している3種目の後に、幾つかの種目について審議したいと思うがいかがか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

では、種目ごとに審議を行う。

はじめに国語について審議する。国語の発行者は5者である。国語について各委員の意見をお願いする。

○野口委員

4年前の教科書採択のことを思い出しながら、今回の採択に臨んだ。私は、次の五つの観点から教科書を選んだ。

1点目は、教科書は身近にあるもの、地元である大田区が教材になっている教科書が一番適しているのではないかという点である。

2点目は、昨年採択された小学校の教科書とつながりがあるものという点である。他区などでは小中一貫校、大田区では小中連携をしているので、どの教科書を選べば小学校とのつながりがあるかという観点で教科書を見た。

3点目は、東日本大震災という歴史に残る事態があったので、この経験を教科書の中に生かさないかという点である。この教科書採択用の本には、東日本大震災の記載はほとんどないが、例えば、原子力の問題、放射能、節電や未来のエネルギー構想などがどこかに記載されている教科書が一番いいのではないか。

4点目は、中学校における教科ごとの専門性を生かすために、現場の教員が扱いやすく、授業がやりやすい教科書かどうかという点である。4年前の採択のときは、関係していた高校の教員に、中学校でどんな教科書を使っているといいと思うかを聞いた覚えがある。今回は、中学校の教員として活躍している知り合いに話を聞き、参考にした。

5点目は、その他これまでの私の経験を生かして、総合的に見て、こういう教科書がいいのではないかと思うものを観点の一つとした。

国語については、資料作成委員会の報告書を読むとともに、現場の教員にも話を聞いてみた。国語は、授業の前に、生徒自身を読むことができる教科書がいいのではないか、あるいは、古典をわかりやすく生徒に教えられないものか、国語は美しい日本語と絡んで美しい教科書がいいという意見もあった。

先程の五つの観点は、国語の教科書選びにマッチするものは、見当たらなかった。そこで、私は、調査委員会等の報告や意見、現場の教員の意見などを踏まえて、「J」「F」に絞った。

私は、教員が話題をとらえて話しやすく、国語の教科書として総合的なバランスがとれている「J」を選択した。

今の子どもたちにとって、国語を学ぶ上で一番大切なことは何かと考えた。「読み」「書き」では、書くことが苦手なのではないか。漢字の書き方、書き順などが身につけていない。「J」は、「読む」の学習の後に必ず「書く」の学習があり、「次につなげよう」「学習を振り返る」などが載っているところも良い。

○鈴木委員

私は、「A」「J」「F」に絞って比較した。

現在、大人も子どももコミュニケーション能力が低下していると言われる。私は、子どもたちが国語の授業を通して、思いを伝える、情報を正しく聞き取る、話し合うことを身に付けることが大切だと考える。

その点、この三者は、「話す」「聞く」「書く」「伝える」などが、構成上スムーズな学習の流れがうかがえる。説明文中に学習の目標が示されていて、確認しながら読み深めていくような導きがある。

「J」は、「季節のしおり」というページがあり、ほっとする。作者の考え、価値、抒情詩などを含めて、三段階に分かれて載せているが、非常に親しみやすい。東山魁夷や竹久夢二の絵、北原白秋や島崎藤村などの詩を入れて、興味・関心を持たせるようなページになっている。そこから、みんなで話し合うことに発展するのではないかと思う。

もう一つは、どの教科書も古典で「竹取物語」などを扱っているが、「J」には「学習を広げる」というところでは「七夕に思う」というページがある。七夕にちなんだ万葉集の和歌が載せられていて、歌川広重の浮世絵を挿入するなどの工夫をして、楽しく学習できるところがいいと感じている。

基本的な「話す」「聞く」、そしてコミュニケーション能力である「書く」ということについては手紙やはがきを書いて、これは3者とも載っている。

私は、最終的には「J」を推薦したい。

○横川委員

私は、次の二つの観点から教科書を選んでみた。

一つは、私自身が中くらいの成績の中学生だった場合に、その教科書を見るとわかりやすいかどうか、興味を引くような話が出ているか、あるいは興味を引くような進め方になっているかという点である。教科書が生徒の興味を引けば、自主的にだんだん勉強していこうという期待もある。

もう一つは、教員の教えやすさかどうかという点である。

国語については、大田区の子どもたちには「説明文の読み取り」及びその「要点を書く力」が足りない。私が中くらいの成績の中学生だった場合、ここにある教科書の中で、「J」「F」が良いと思う。特に「J」は、下段の説明文で「目標」を定め、その読み取り方が丁寧に書かれている。そして、それを「次へつなげよう」としている。そういう点から「J」が良いと思う。

「F」には、「課題を持って書こう」という部分があり、これは「J」の目標に匹敵すると思う。そういう観点から「F」も良いと思う。それから、「F」のいいところは、資料集があり、独立して使えるようになっているところである。

しかしながら、「J」のいいところは漢字に力を入れていて、3年生の教科書に「小学校6年生で習った漢字一覧」があり、生徒が自習できるようになっている。私は、総合的に見て「J」が「F」よりも若干いいのではないかと思った。したがって、「J」を推薦したいと思う。

○教育長

私は、結論的には「F」がいいと考えた。

今回の教科書採択にあたっては、幾つか私も基準を持っている。

一つは、大田区の中学生在が使いやすい教科書かどうか。この使いやすさとは、文字の大きさやレイアウト、写真、絵、図を使って、視覚的にもわかりやすい工夫ができているかどうかということだ。

二つ目は、興味を持たせ、意欲を持続させることができる教科書かどうか。退屈させない工夫があったり、家に帰ってもう一度読んでみようと思ったり、そういう動機づけができるような内容になっているかどうかということだ。

三つ目は、先程、野口委員の話にもあったが、大田区という地域に関連の深い人物等がしっかり記載されているということが大事なことだ。これは、子どもたちがその人物などを手がかりにして、時間・空間の親しみを通して記憶に定着する割合が高まるし、学習意欲が高まっていくので、これが大事だと思っている。

四つ目は、仮に教科書が大田区という特性を抜きにしても、よくできている教科書でなければならない。そのような普遍的な、力のある教科書だということが挙げられる。

五つ目は、教育目標、教育振興プランなどとの関連性で評価できるものかどうかである。こういった基準で各科目を判断してきた。

国語については、「F」は本文である教科書と資料集とに分かれている。資料集がなくても十分教科書としてその任にたえられるものであるが、資料集が非常に充実した中身で、親子ともども勉強になる。例えば、2年生の資料集には、池田晶子さんの「友愛 - 14歳の君へ」が載っているが、子どもたちにとって、この時期に読めば、極めて有益な内容である。また、野坂昭如さんの「凧になったお母さん」、中谷宇吉郎さんの「卵の立つ話」などの大変すぐれた作品が載っている。これは親子ともども勉強できて、夏休みなどにもよいかと思う。

一方、「J」の教科書も大変よくできている。長い間に鍛えられた教科書であるということで評価するが、例えば、三年生の教科書にある「高瀬舟」を見ると、「J」は2ページに2段組でかなり字が小さい。「F」のほうは、大変読みやすい活字の大きさであって、視力の弱い子どもも十分読める。

また、「F」には、「学びの道しるべ」というところがあり、読んだ中身を振り返りながら、その文章のポイントは何だったのかを考えるという工夫がされている。生徒同士、あるいは教員が、この文章についてみんなどういうふうに考えるのかということ質問して、自分はこう思った、根拠はこうだと、ほかの子どもがそれとは違った形で言った場合は、その根拠は何だろうかとお互いに議論し合って、思考力をだんだんと高めていく、そういう教材になっていると思う。

「J」について、私は疑問に思ったところが二つあった。一つは、3年生の教科書246ページの「二つの悲しみ」という作品の冒頭にある「私たちは、第二次大戦から二十年たった今、直接被害のないベトナムの戦いを見て、私たちが失ったもの、その悲しみを、新しく考えることが必要だと思います。」という文章についてである。「直接被害のないベトナムの戦い」という言葉は、日本語として非常にあいまいな表現である。直接日本には被害のない戦争であるが、と言わんとしているのだとは思いますが、ベトナム自身はアメリカにより甚大な被害を受けている。であれば、主語、述語、目的語などを

明確にした正確な文章を載せないで、誤った理解がそのままになることがある。それに対して教員が、実は日本語として意味が通りにくいけど、こういうことを言わんとしているのではないかなというような解説がつくことによってはじめて了解できる。これは、作者が書いたオリジナルの文章のまま載せたということであるが、言葉の取扱いについて、出版社としてしっかりした対応をすべきではないかと思う。もう一つは、3年生の教科書198ページの「温かいスープ」というエッセイについてである。私は、これ自体のタイトルや内容について批判するわけではないが、ただ、表現として、この方がパリなどにいた1945年から1957年までの間、日本も日本人も惨めな時代だったと書いている。そういう表現もあるのだろうが、そう感じない方もたくさんいたわけで、また、この文章は、幾つかの内容で日本人をことさら悪く描いているように感じられ、私は非常に不愉快な思いをした。私の少年時代、確かに日本は物質的には貧しかったが、非常に明るく、楽しい日々を過ごしたとっていて、惨めな時代だとは思っていない。私の同期の者たちともそのように話していて、人間というのは、物質的に豊かか豊かでないかによって、幸せ感とかそういうものが決まるものではないと思っているので、一方的に時代否定をするようなものを、掲載している教科書でいいのか。これは作品なので、主観的に書くこと自体は作者の自由だが、それを採用して載せるとなると、また違ったイメージになる。

大田区は、27回目になる中学生の海外派遣をしている。セーラム市に加え、今年からはブレーメン市にも派遣しているが、現地のアメリカ人やドイツ人と友好関係を保って、その外国の文化を十分学んで帰ってくるという事業をしている。その中で、お互いに偏見なしに、十分な人間関係をとって、コミュニケーションを一生懸命努力してわかり合っていくと、そのような国際化教育を進めていて、その辺は十分定着していると考えている。そういう子どもたちにとって、外国は、文化的にも非常に相違があっても、人間というのは同じものだというような意識はもう既に定着しているような感じがする。こういう暗いイメージでいつまでも載せるのはどうなのかと感じているので、総合的に考えてよろしくないという結論を出した。

○藤崎委員

今回、検定をすべて通っている教科書なので、中身について大きく優劣があるとは感じていない。その中で、国語に限らず、私がどういう気持ちで臨んでいるか、最終的にどういう基準で教科書を選んでいくかということについて述べさせていただく。教育委員会委員の中では、小学生、中学生の子どもを持つ親としてどうなのかというところが私の一つの特徴であると思うので、その観点でいろいろ考えた。

今回は中学生が使う教科書なので、生徒たちが自分で興味・関心をそこに向けられるかどうか。例えば、もちろん教科書に限らず、先生とつくっていく授業とか、生徒も絡んでいく授業で影響するが、授業の中心となるのが教科書なので、その教科離れを極力避けていきたいという観点で見ていった。それで、彼らの興味・関心を引くという観点、その子どもの視点で見たときにどうなのかと、あくまでも想像の世界になるが、その観点を重視して各教科を見させていただいた。

国語については、私も他の委員と同様に、「F」「J」の2者が最終的に残った。そ

の中で、私が一番重きを置いたのは、中学生の興味・関心を引くかというところである。この点で、私は、「F」の資料編の広がりについて一番興味を持った。たまたま中学生何人かに、どの教科書を家で一番読むかという話をしたときに、国語という答えが多かった。国語に興味を持つことが非常に重要だと思う。「F」の資料編が分冊になっているデメリットとして、常に2冊を持って授業に臨むのかということがあるが、使い方によっては、例えば資料編を自宅に置いて読んでいくという形で、その興味・関心の広がりぐあいというのが非常に大きいのではないか。一方、「J」はすべての単元のまとめ方、終わった後の振り返りの仕方の工夫というのは、非常に魅力的であると思う。「F」「J」を全般的に見て、最終的には子どもたちの興味・関心を引く可能性を広げるという観点から、私は「F」を推薦したいと思う。

○委員長

私は、「J」か「F」で最終的には悩んだ。結論的には「J」がよいと考えた。そのように考えるに至ったのは、例えば、どの教科書にも載っている「竹取物語」では、「竹取物語」の扱い方、拾い方、どの部分を古文で表示するかという選択などが、いろいろと工夫がされ、考えられている感じがした。また、「竹取物語」というのはどんな話なのかというのが全部書いてある。皆がかぐや姫のお話は知っているが、かぐや姫が月に帰ってしまうところで終わる話がメインだ。「竹取物語」では、その後日談があり、不老長寿の薬を富士山の噴火口で燃やした。だから富士（不死）の山なのだよ、ときどき煙が上がっているのは、そのときの煙がまだ残っているのだというようなことまであり、中学校になると新しい知識が入ってくるのだと感じるのではないかと思った。そういった工夫に一日の長を感じた。

3年生では、「J」「F」とともにスピーチを扱っているが、「J」は記者会見型自己紹介というふうに具体的に絞っている。そのほうが取り組みやすく簡単で、教えやすく、実施しやすい。スピーチでは、話す内容を決めて、その要点に対する反応を見て話せばよいのだが、抽象的に言うと当たり前でも、では具体的にどの様にやったらいいのかというのを生徒に指導するとき、あるいは生徒として演ずるときに、自己紹介型はつまらない、あるいは記者会見型はつまらないなと思ってしまうとそれまでで、これは賛否あるかもしれないが、私は、このスタイルでやっごらんというように載せているところが、教科書としての工夫なのではないかと思った。

それから、内容的に、筆者の主観が入っているところはどうだろうという教育長の指摘があったが、社会科の教科書などで、戦争の時代はこうだったと一面的に書くのであればちょっと問題だが、文学作品や、あるいは、そういう読み物として書き手の主観が出てくるのは、これはもう国語で、しかも中学3年生が読むのであれば許容範囲かなと私は思った。書き手も大正生まれ、終戦時23歳の人だ。その人が感じた戦争後の考え方と、あるいは戦後、私も、その貧乏だけ嫌だとか思ったことは全然ないし、大変な時代だったと言われているが、安保闘争なんて言っても意味はわからないけれども、子どもたちも、絶えずその「安保反対」とか言っていた。別に安保に反対なわけではなくて、みんなが、大人がやっているからそうやって、それが楽しくて、当時、大人の方は大変な戦争に行っただか思っているかもしれないが、私などはそのとき楽しかったのだけ

ども、大変だと思っている大人がいてもよいし、楽しかったという子どもがいてもいいのではないか。同じ時代を生きていても、どんなふうに生きているかによって違う面もあるのかという話なので、そこは歴史の教科書で、あの時代はみんな暗くて、日本人はみんな惨めだったのだよと言われると困るが、国語だったらいいかと感じたので、私は「J」が良いと思った。

一通り意見を述べていただいたが、追加意見があるか。

○野口委員

教育長の話聞いて、なるほどと思ったが、教科にもよるが、国語の場合は、一つの作品として捉えたほうがいいのではないかと思う。例えば、委員長が言ったように、その時代、時代にもよるだろうし、国語については、ほかの教科とは違う点があつていいのかなと感じた。

私は「F」も大変いいと思ったが、どうして1冊にならなかったのか。資料編がついていて、ちょっと厚いかもしいないが、全員ではないが、2冊あると1冊忘れてくる子どももいる。すごくいい資料なので、1冊になっているとよかったと思う。

○教育長

今、野口委員が言われたことは、私ももっともだと思っている。やはり教科書という限られた字数の中に込められた作品、これはどういうふうに使われたのかという意図が入ると大変大きなインパクトを与えるものである。教員がそれをきちんと相対的に評価して子どもたちに説明すればいいが、ただ、その作品を特別化して、そのまま読んでしまうと、誤った印象を喚起するおそれがあると思う。

なぜ私がこういうことを言うかということ、他の教科書にも国際性を扱っている事例があった。あるアメリカンスクールに入っている日本の小学生がいた。そのアメリカンスクールの教科書には、第二次世界大戦についての記述がある。それは、大変野蛮な日本が戦争をしかけて、結局、原水爆を落とされて戦争をやめたが、日本は本当に悪魔のような国だったというような、そんな記述があった。それで、その子は、その教科書を使って授業をされるのが非常に嫌だと思っている。いよいよその授業の当日になってしまった。ところが、その授業の中では、学校の先生は、その教科書をそのまま読み上げるのではなかった。実は戦争というのは日本が一方的に悪くて、それに対して善玉のアメリカが戦ったというのではなくて、日本も石油を外国に依存していて、その石油の量を締めつけられて、やむを得ず戦争に突入したということもあるし、アメリカも戦争に参加する準備をしながら機会をねらっていたというような状況もあった。戦争というのはお互いにいろんなファクターがあつて起こるものだということを教えてくれた。そういうアメリカの先生もいたということで、その子どもは感動した。同じ戦争などをテーマにしながら、国際性とは何なのかと、他国から見た日本や日本人についてを例にして考えさせている。お互いに過去は過去として反省して、互いの人種とかその国の偏狭な制約を超えて、お互い人間的にわかり合うこともできる。事実を冷静に見つめ、国際政治を勉強しようという気にさせたという、そういう物語もあった。

同じ国際性を扱っても、教科書によって、子どもが読んだときの印象は全然違うもの

だ。そういうことも含めて、やはり教科書の持っている影響力は強いので、もし「J」を選ぶのであれば、私が最初に指摘したように文法上の問題点、その記述の主観性、あまりにも過剰な主観性みたいなものをやはりきちんと教師がコメントしていくということを前提にすれば、辛うじて容認できると思う。

○委員長

ほかに意見はないか。

いろいろな視点から意見を寄せていただいたが、「J」を評価する意見がやや多かった。「F」にも捨てがたいものがあるが、1者に絞るとしたら、やはり議論を聞いていて「J」であるかと思うが、いかがか。

○藤崎委員

事務局に質問だが、教育長が話されたことで、教科書は1冊だが、教え方は様々という形になると思う。ここの教え方は、これで進めてもらいたいというような、教育委員会としての意向があるときに、学期や授業が始まる前に、教育委員会から言葉などについて委ねるということは可能か。

○指導課長

結論的には可能である。採択にあたり、これからそれぞれの指導計画をつくっていく。それを踏まえて、そういう指導を、各学校に留意点として伝えていくことは可能である。

○委員長

「J」と「F」と分かれていて、やや「J」が優勢だと思うが、決を採りたいと思う。「J」を支持する委員は、挙手をお願いする（4委員が挙手）。「F」を支持する委員は挙手をお願いする（2委員が挙手）。では、国語については、多数決で「J」を採択する。

続いて、書写について審議する。書写の発行者は6者である。

各委員からの意見をお願いする。

○教育長

私は、書写については「E」とする。理由の一つ目は、大田区になじみのある大田区立中学校席書会が協力し、その写真も3ページに掲載されていることや、74ページの「伝票」に「大田区蒲田2-6-9」と記載されているということで、身近な人々や地名が紹介されることによって、子どもたちがとても地域に対して関心を持ち、それが意欲につながっていくと考えている。

もう一つは、1冊にまとまって扱いやすい。シンプルな見やすい構成であって、教科書として扱いやすい。手本となる習字が大きく明確に、しっかりと書かれていて使いやすい。それ以外にも、学習の初めの段階で確認する事項として、毛筆で書くときと硬筆で書くときに分けてわかりやすく、また、さらに板書のときのチョークの持ち方なども丁寧に扱っているので、この教科書を選んだ。

○横川委員

中くらいの成績の中学生の気持ちで選んだところ、私も「E」がいいのではないかと
思う。特にこの手本が、見開き2ページで一つの手本となっている。例えば、「栄光」
などは、半紙の大きさの見本になっている。これを見ながら毛筆で書くことが多いので、
字が大きくて良いと思う。毛筆で書くときの筆の持ち方、硬筆で書くときのボールペン
や鉛筆の持ち方もきちんと出ているということで、「E」が良いと思う。

○野口委員

書写は、今の子どもたちに、硬筆の字を練習してもらいたいと思っている。そういう
点で見ると、「E」は左側に手本があり、生徒が右側に書くようになっているなど、よ
くバランスがとれている。また、「E」のお手本を書いている方は、元大田区教員で、
この先生のお手本で大田区立中学校席書会をやっている。それを思うと、この教科書し
かないと思っている。書写は、手本を書いてくれる先生がいたところで習ったほうがい
いのではないかと思うので、文句なしに「E」を選んだ。

○鈴木委員

私が書写の教科書を最初見たときに、基本的なところを考えた。書は、日本の文化で
あり、芸術でもある。姿勢、筆の持ち方や運筆といった基本を最初にしっかりと習うこ
とが大切である。また、コミュニケーションツールとしての手紙やはがきといった日常
生活で役立てることを意識したものが、教科書全体に組み込まれていることも大切だ。
このような観点から、私は「E」「J」の2者に絞り込んだ。「E」は、最初にきちん
と机に向かっている写真や筆の持ち方の写真が掲載されているが、写真の角度が良く、
持ち方、書き方、筆の種類がわかりやすい。最終的には、私は「E」を推薦する。

○藤崎委員

私も結論から言うと「E」になる。比較対照は「J」だ。私は、硬筆の充実について
も最初は観点に入れていたが、3年間で50時間という限られた時間しか割けないとい
うことを考えると、やはり毛筆というところで、気持ちも新たに、しっかりと書を書く
という時間に、この少ない時間は充てられるのだろうかというところを考えたときに、一番
書きやすい毛筆のお手本が出ているのはどれなのだろうかという観点で見た。先程、横川
委員がおっしゃったような見開きで、半紙と同じ大きさで、横に置きながら書けるとい
うことと、もう一つは、これは構成上の問題だが、1冊にまとまっていて、3年間持ち
歩けるということに関しては、先程、国語の観点とはやや違うが、この1冊ですべてが
見られるというのが良いと思う。

○委員長

私も、書写は「E」がよいのではないかと思う。理由については、皆さんが言ってい
ただいたが、見開きの見本が多いことと、1冊にまとまって使いやすいところから考え
て、「E」が良いと思う。

全員「E」がよろしいということなの、書写については、「E」でまとめてよろしいか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

書写は、「E」とする。

では、続いて数学について審議する。数学の発行者は7者ある。それでは、数学について各委員から意見をお願いします。

○野口委員

大田区の教材を数学の教科書に掲載するのは難しいようだ。そこで、私は、小学校とのつながりという観点から、数学の教科書を選んだ。

それから、数学は専門性を生かさなければいけない教科なので、数学の教員に聞いてみた。すると、問題数が多ければ、子どもたちは計算などをたくさん解くことができ、もう一回それを見ながら復習もできるので良いということであった。指導主事に聞いてみたところ、問題数はどの教科書も多いということであった。

中学校1年生で数学が嫌いになる子どもが多いというのを聞いた。いわゆる中1ギャップである。これを解消し、数学離れを防ぐためには、小学校の算数から段階を踏んで、中学校の数学につなげていける教科書が良いと思う。そういった配慮がある教科書はどれかという、「A」は実生活に即した問いや話が多く載っていて、私はいいと思った。

○鈴木委員

私は「A」「G」を選び、比較した。結論から言うと「A」を推薦したい。

「A」は、既習事項を入れていて、子どもたちが振り返って学習できるところがよい。また、大田区では小中連携教育を行っていくところだが、「A」は、例で実生活に即した問いや話を導入している。

私は、図形を中心に教科書を見たが、「A」は、正多面体などの表現がわかりやすく、図形も鮮明に描かれていて、目で見て親しみやすい。数学は、できれば楽しく学んでもらいたいので、数学が嫌いにならないような形で載っているのが「A」だった。

また、「A」には、「数学マイノート」というのがあり、確認をしながら振り返ってみる、一緒に話し合ってみるというような活動についても意識をして、取り入れていると思った。

○横川委員

私は、自分が中くらいの成績の中学生ということで教科書を見て、候補に残ったのは「A」「E」「G」の三者である。あまり数学を好きではない、とってそんなに嫌いでもない子どもが見てどうかということからすると、非常に丁寧に書けているのが「E」ではないかなと思う。私自身のことを考えてみると、中学校のときに、数学の先生があまり教えるのがうまくなかったのではないかと。それで、私はあまり数学が好きではなくなってしまうのではないかと思う。そういうことを考えると、「E」は非常

に細かく書いてあって、教員がうまく教えていただければ、子どもたちにとってわかりやすい教科書なのではないかなと思った。

教える教員にも話を聞いたところ、「G」が教えやすいというような意見が多かった。野口委員の話にあったように、練習問題がたくさんあり、それをどんどんやっていけば、何となく数学ができるようになってきてしまうのではないかと思うが、先生にもいろいろな方がいると思うので、そういう意味では教えやすい、そして、子どもが理解しやすいという意味で、私は「G」を推薦したい。

○教育長

私も、結論的には「G」を推したい。理由は、まず、各章の前に、これまで学んだことの振り返りのページがあり、これをこなしていくと、本文にスムーズに入っていくことができる。導入部分がしっかり置かれていることも大変いいと思う。

もう一つは、3年生の数学の中で、例えば15ページの乗法の公式では、式の展開等をその面積をあらわす図を使って分解して示すところで、この式の展開の意味が図的にわかるようになっている。この表記がずっと続いているということは、非常にタイムリーに、その式と図が相互に対照されて理解できるようになっているということである。これは抽象的な思考を助ける、図によってこれを例証するような相互の関係があつていいと思った。

それから、因数分解をしっかり繰り返しやることによって、これを習熟していく。さらに平方根に入って、この計算に熟達した上で2次方程式に入る。2次方程式の解法においても、解の公式をもとに問題を解くことは、一つの方向であるが、なかなかこの解の公式を暗記することは、式の意味がよくわからないままでも暗記する力のある子はいいが、そうでない子は、因数分解をもとにして、その2次方程式の理解を進めていくほうがわかりやすい。その平方根とか因数分解の解き方を十分に熟達した上で、最後に解の公式に行くと、解の公式も自分で導いていくことができ、どういう意味かなどというのがわかるようになってくるので、これの説明が「G」の場合は非常にわかりやすい。私も、実際、この本の問題を自分で試してみたが、非常にスムーズにいくなということも実感した。全体として使いやすく、子どもたちの勉強の意欲が持続されるのではないかと考え、「G」を推薦する。

○藤崎委員

私は、個々の単元については、長短あると思うので、一つずつの比較は途中で断念した。そこで、中学生が数学嫌いになるのは、どういうところからかと考えた。親や教員の興味の引き出し方の問題もあるのかもしれないが、数学が生活と全く関係ないのではないかというところから、彼らが離れていっているというのも感じていた。各教科書いろいろ工夫されている中で、特に、どうやって生活と結びついているか、そこをどのように工夫しているかという観点で、目次を中心にまず見た。大体、各教科書の巻末にいろいろと工夫がされていることに気づいたので、そこを中心に見ていった。

そこで絞り込んだのが「A」「G」「M」の3者である。例えば、2年生で見たところ、「A」では課題編と問題編に分けていて、課題編では「数学の探求」「生活と数

字」「数学の歴史」「数学パズル」という形で、興味・関心を持たせるような工夫がされており、問題編では復習も兼ねた問題集が出ている。「G」では自由研究と問題に分かれており、自由研究には「陸上トラック」「時計の長針と短針が重なる時刻」「長方形の分解」「点字の仕組み」「点の数と面積の関係」があり、その後、問題がある。最後に「M」では数学の広場と問題に分けていて、「広がる数学」「読み取る数学」「考える力アップ」「数学を通して見てみよう」があり、それから問題となっている。この比較を重点として、本題とは違うのかもしれないが、中学校において数学嫌いというところに少しでも歯止めをかけるよう、興味を持ってもらう、生活とつながっているのだという関心をそがないようにするという観点から、その中でも「A」「G」が興味を持てる。

○委員長

私は、小学校からのつながりなどを考えると「A」がいいと思っていたが、その後いろいろと議論をし、いろいろ話を聞いて、3年の因数分解、2次方程式のところで、解の公式にいきなり行かないで因数分解に行くというのは魅力のある解法であり、指導法であるという話を聞いて、はっと考えてしまったというのが実情だ。

私が子どもの頃のことを思い出すと、とにかく念仏のように解の公式を覚えて、力わざで、その解の公式で解いて、答えに到達していたなと今は本当に思う。解き方として数学的にセンスがいいのは、因数分解で解ければ因数分解で解くほうが美しい。そこを飛ばしてしまって、数学的な思考を放棄して、これさえ覚えればいいやと、おまじないのように覚えてやっていく解き方がよかったのかと思う。その解の方式を覚えるのが意外に大変だったりして、そこでつまづいてしまう子は全然救われないなというようなことを考えるに至った。

そうすると、私は、「A」ではないかと思っていたが、この時点では「G」がよさそうだなと心証を変えたところだ。

ほかに意見はあるか。

「A」「G」が半分ぐらいという感じか。

○藤崎委員

「A」と「G」で迷っていると話したが、私の観点というのは、子どもたちが数学離れしないようにということだ。今、教育長を中心に出していただいた、教員が子どもたちに教えるステップ、子どもたちが数学を解いていくのに、そのステップという観点は入れていなかった。私も、「A」と「G」を並べていたが、その観点で見ると、今の段階では委員長同様に「G」のほうが上かと思う。

○野口委員

数学は、答えがはっきり出なければいけないものだが、教科書というのは、子どもが考えて、子どもが取り組みやすいものが良いと思う。そういう観点から、部分的な因数分解や面積とかいうことよりも、総合的に見て、子どもが取り組みやすく、問題がいっぱいあり、頭の訓練ができるような教科書が一番いい。子どもたちが、後から見返した

時に、数学の問題が解けたのだという満足感を持つことができるので、私は、「A」を推薦する。

○鈴木委員

私は、「A」と「G」を比較して「A」を推薦した。

それで、2次方程式に関しては説明を聞くと、確かにそのとおりだと思った。「G」については、「学習をする前に」「レッツトライ」「チャレンジコーナー」などで、スムーズに導入できるような工夫があるので、私としては、必ずしも「A」に固執するものではない。

○委員長

「G」がやや優勢かという感じがする。因数分解を一生懸命やると高校や大学でもとても役に立ち、実用的かもしれない。そうすると、「G」がやや優勢と見たが、使いやすさや教えやすさの観点から、「G」ということでよいか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

それでは、数学は「G」とする。

本日予定していた科目の審議は終了したが、10分間休憩を取り、その後、理科の審議に入りたいと思う。

(休 憩)

○委員長

それでは、第8回大田区教育委員会定例会を再開する。

それでは、理科について、審議する。理科の発行者は5者ある。それでは、意見をお願いします。

○横川委員

私は、「B」「E」の2者に絞った。

まず、「B」は、非常に詳しく書いてあり、理科が好きな私も読んでいるとのめり込んでしまうぐらいであった。理科に興味のある子であれば、この教科書はとてもいいと思う。観察・実験が大変多く出ていて、なかなか興味の持てるレベルになるのではないかと思う。例えば、2年生の「生命を維持するはたらき」というところで、血液とその循環についても、他者に比べるとページ数も少し多く、電子顕微鏡の写真なども出ている。「B」を選んだ場合に、子どもたちを理科好きにしてあげられるのではないかと思う。昨今、理科離れという傾向があるが、私は、理科の好きな子どもを増やしたいと思っている。

「E」は無難にまとめてあり、考察とまとめとかがきちんと書かれている。そして、実験結果の写真が非常にわかりやすく、内容や量は「B」に比べると少ないが、ある意味では、それでバランスのとれた、わかりやすい教科書である。両方を比べると、やは

り、私は「B」を推薦したいと思う。

○藤崎委員

私は「B」「E」「M」に絞り込んだ。

特に「B」の良さは、先程、横川委員の意見にあったとおりに思う。圧倒的に実験や観察に関する情報量が多いのが「B」であった。

なぜこの三者に絞ったかという、雲のでき方を記載した部分のわかりやすさを見ていくと、特に子どもたちが興味を持つ写真を比較すると「A」「G」については、その写真の説明はなく、文章と図だけである。写真があったのは「B」「E」「M」だったが、この三者を比較していくと、「B」「M」はその変化が、写真だけではわかりづらく、「E」はわかりやすかった。写真という観点で絞り込んだのが、「B」「E」「M」ということになる。その中でも、「B」は、観察・実験の情報が豊富に出ているという良さを感じた。

また、酸化水素ナトリウムに関する記載などについても比較してみた。

先程、1年生の理科離れという言葉が出てきたが、私は、第1分野、第2分野の並びも重要ではないかと感じた。教科書を表から開いたときに、「E」は身の回りのことである第1分野から、「B」は植物などの第2分野から入っている。自分たちの身近なことなのだということから入っていけるような仕立てのほうがより興味を引くのではないかと思う。「E」「B」に絞り、最終的には「E」を推薦したい。

○鈴木委員

私は、「E」「G」の2者に絞って比較した。

新学習指導要領では、考えて判断をしっかりと、表現を創造するというような活用が重視されるということである。大田区では、問題を解決する力を育てることを重要視している。

まず、子供たちの興味をひいて、理科を好きになるということから考えてみた。子どもたちが理科の授業で興味を示すのは、実験ではないかと思う。そこで、この実験の部分に特化して比較した。実験をしたときに、結果がどのようになるのか、疑問がたくさんあるほど興味が湧いてくると思う。その実験の酸とアルカリの部分のところをまず見たときに、顕微鏡の使い方が非常にしっかり出ている。また、それに付随するピペットの使い方も、角度的に見て、どのような形で使ったらいいのかということも、非常に順序よく丁寧に説明されている。ただそれだけではなくて、また段階ごとに、使うときの安全面についてもわかりやすく細部にわたって指摘をしている。

また、小中一貫教育を考える上で、学習の流れということで、小学生のころから実験を楽しんで学んできた部分を、そのまま中学生になっても関心を持ち続けて、理科が好きになってもらえるといいと思う。

私は、「E」「G」ともに非常によくできているとは思いますが、子どもたちの「考える力、判断する力、表現する力の活用」が発揮できるようにつくられている「E」を推薦する。

○野口委員

私は、理科も数学と同様に、小学校とのつながりや実験について考えながら見たが、どの教科書も良く工夫されていて、大差ないという気がした。

そこで、3月の東日本大震災以降、津波、原子力、放射線、新エネルギーという問題が注目されているので、私は原子力に関する部分を中心に各者を比較して見た。良く書かれているのは「A」「E」「G」の三者であった。この中で「A」は、章の終わりに「チェック」欄があり、いろいろなエネルギーについて確認することができるようになって良いと思った。皆さんが推薦した「E」、原子力に関する部分で良い「A」、あるいは、実験や理科教室等を考えると「B」も良いので迷っている。

○教育長

結論から言うと、私も「E」を推薦したい。

「B」と「E」を互いに比較して見ていた。

「B」は大変内容が充実している。例えば、地震や放射線について書かれているところを見ると、相当なページを割いて、かなり詳しく説明していて、一般の方々も、この教科書を自宅に備えておくと非常に勉強になるなどと思った。例えば、放射線について比較すると、「B」には自然放射線による年間線量は2.4ミリシーベルトであるということや、1ミリシーベルトが1,000分の1シーベルトであるとか、1回の胸のレントゲンで約0.1ミリシーベルトの被曝があるとか、その他にも様々な詳しいデータも載っていて、今、話題になっている放射線についての一般教養が持てるようなレベルになっている。

それに対して「E」は、放射線の利用として医療検査、空港の荷物検査や建物の壁や柱などの内部の検査などに使われていることなどが写真入りで掲載されていて、非常にわかりやすい表現に努めている。現在、放射線については、子どもたちの疑問に対して、かなり時間を割いているという感じがある。ただ、この教科書では、3年生の64ページで福島第一原子力発電所の、往年のしっかりした建物があつたころの絵や図が書いてあるが、今は廃墟みたいな形なので、この扱いをどうするかというような若干疑問になっているところもある。

また、地震については、「E」と「A」が詳しく書いているが、やはり津波の被害については若干弱い。これは、今回の東日本大震災の津波の破壊力については、学者の方たちも想定外の破壊力が示されたということなので、教科書にも十分記述がなされていないこともやむを得ないかとは思いますが、この辺は改訂をされるとありがたいという感じがした。

全体的には、字の大きさ、文章、写真や図の配置が工夫されていて読みやすく、子どもたちにとって飽きが来ないような教科書となっているのは「E」だと思う。一般的な教養として、大人も読める教科書としては「B」が優れているかなという感じであるが、学校現場としては、簡にして要を得た「E」のほうが良いと思う。

○委員長

私も理科好きの子どもだったので、読んでおもしろいのは「B」だと思う。全章につ

いてそのように感じる。遺伝子のらせん構造の発見で、「ワトソンとクリックの発見」というのがどの教科書にも書いてあるが、ワトソンとクリックが啓示を受けたのは、こつこつとレントゲン写真を撮っていたロザリンド・フランクリンという女性学者であった。彼女の細密な研究を彼らが見て、なかなか解けなかった謎がこれで解けたとあって学会で発表し、この2人がヒーローになったというようなことがきちんと「B」には書いてある。そういう存在について、例えば「A」は、ロザリンド・フランクリンの存在も出てこない。「E」は、フランクリンという名前は書いてある。ただ、「B」は情報が多過ぎるのかと思う。そういう意味では、大人が読む、あるいはすごくできる子がぐいぐい読んでいくというのはいいかもしれないが、中くらいの子も、理科はどっちかという嫌いな子も含めてやっていく、それがわかりやすくバランスがいいのが「E」なのかと私も思った。教科書としては「E」が良いという印象を持った。

○鈴木委員

今、委員長のお話に、人物が描かれているというところで、「どんな仕事？」というのがある。そこはコラム形式で載っているが、理科系の人物紹介が書かれている。また、「E」3年生の巻末にある資料に「ノーベル賞を受賞した日本人科学者」が載っている。教科書を開いて見たときに、興味深いと思った。

○委員長

「ノーベル賞を受賞した日本人科学者」として、湯川英樹さんや朝永振一郎さんがずっと載っている。

ほかに意見は、あるか。

教科書としてのバランスなどを考えると「E」がいいのではないかという意見が多かったように思う。もちろん、内容的にたくさんの情報が載っていて、非常におもしろいという評価で、「B」も捨てがたいものがあるが、1者に絞るとしたら、やはり「E」が良いのではないかと考えるが、いかがか。理科については「E」がよいということでまとめてよろしいか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

では、理科については「E」とする。

以上で本日の教科書採択についての審議を終了する。

次回、8月4日午後2時に開催する臨時会においては、社会（地理）、社会（歴史）、社会（公民）、地図、音楽（一般）、音楽（器楽）の6種目について審議を行う予定である。各委員には、引き続き調査研究をお願いする。

それでは、指導主事及び指導課管理係職員は、退席願う。

ここで5分間の休憩とする。

(休 憩)

○委員長

それでは、第8回大田区教育委員会定例会を再開する。

日程第3は「部課長の報告事項」となっているが、特段の報告事項はない。

日程第4 議案審議

○委員長

第49号議案について事務局からの説明を求める。

○教育総務課長

第49号議案 大田区立学校の学校医、学校歯科医及び学校薬剤師の公務災害補償に関する条例の一部を改正する条例原案について説明する。

学校医、それから学校歯科医などが公務による怪我や障害により、常時あるいは随時に介護を受ける状態になった場合、介護補償が行われることになっている。この場合の補償金額や支給方法などは、公立学校医、学校歯科医及び学校薬剤師の公務災害補償に関する法律第4条により、政令で定める基準に従って、地方公共団体の条例で定めるととされている。この度、この政令が改正され、介護補償の額が改定されたために、条例の一部を改めるものである。

介護補償は月を単位として行われ、実費が支給されるという原則がある。条例第11条第2項第1号では常時介護で介護費用を支出したときの上限が定められており、現行の10万4,730円を10万4,530円に改めるものである。

同項第2号では常時介護で親族などの介護を受けるときの最低補償額が定められており、現行の5万6790円を5万6,720円に改めるものである。

同項3号では随時介護で介護費用を支出したときの上限が定められており、現行の5万2,370円を5万2,270円に改める。

同項4号では随時介護で親族などの介護を受けるときの最低補償の額が定められており、現行の2万8,400円を2万8,360円に改める。

付則の第1条として、施行期日は公布の日からとする。第2条として、経過措置を定めている。

本日、了承が得られれば、第3回区議会定例会に条例案を提案したいと考えている。

○委員長

ただいまの説明に対して、意見、質問はあるか。

○横川委員

わずかな金額ではあるが、なぜ減額となるのか。

○教育総務課長

法律で、公立学校の学校医の公務災害補償に関する法律があり、この法律の中では、政令で定める基準に従って条例で定めることとされている。この政令を定めるときは、国家公務員災害補償法を参考にすることになっている。国家公務員災害補償法は人事院規則によることになっており、結局は、国家公務員の長期補償が下がったために、こちらにも連動して下がったのかと思う。

○委員長

ほかに意見、質問はあるか。

(「なし」との声あり)

○委員長

第49号議案について、原案どおり決定してよろしいか。

(「異議なし」との声あり)

○委員長

第49号議案について、原案どおり決定する。

これをもって、平成23年第8回教育委員会定例会を終了する。

(午後3時48分閉会)